

漢代五言詩史上に占める蘇李詩の位置

柳川順子

比較的早い時期の五言詩に、前漢の李陵・蘇武の名に仮託された一連の作品がある。この詩群は、いわゆる「古詩十九首」に代表される漢代詠み人知らずの五言詩や、建安文人による五言詩と多くの辭句を共有しており、この事實に拠つて、三者をそれほどかけ離れてはいない時代の産物だと推定する論が行われている。⁽¹⁾これに対して私は、この一群の五言詩を、建安文壇の成立以前、すでに文人たちの間に広く流布していたものだと考える。本稿は、この推定の根拠を示し、本詩群の成立の場や基本的性格について考究しながら、その漢代五言詩史上に占める位置を探り出そうとするものである。なお、本稿で取り上げる李陵・蘇武の詩（以下、蘇李詩と略称する）は、差し当たり『文選』⁽²⁾卷二十九に収められた作品に限定することとし、その個々の作品名は、李陵・蘇武の名と『文選』における配列順とによって簡略に示すこととする。

一

建安詩人たちの五言詩の中には、たしかに蘇李詩とその語句やイメージを共有する作品が少なくない。この現象の来源を、時代の空氣というものに求めることはできないと私が考えるのは、たとえば次のような作品が存在しているからだ。『文選』卷二十、曹植「送应氏诗」二首（其二）⁽¹⁾

清時難屢得	清時は屢は得ること難く、
嘉会不可常	嘉会は常にす可からず。
天地無終極	天地には終極無く、
人命若朝霜	人命は朝霜の若し。
願得展嬋婉	願はくは嬋婉を展ぶるを得んことを、
我友之朔方	我が友は朔方に之く。
親昵並集送	親昵は並びに集まりて送り、

置酒此河陽 此の河陽に置酒す。

中饋豈獨薄 中饋は豈に独り薄からんや、

賓飲不厭觴 賓の飲むは觴を尽くさず。

愛至望苦深 愛の至りては望みは苦だ深し、

豈不愧中腸 豈に中腸に愧ぢざらんや。

山川阻且遠 山川は阻しくして且つ遠し、

別促会日長 別れは促り 会日は長かなり。

願為比翼鳥 願はくは比翼の鳥と為りて、

施翮起高翔 翮を施へて起ちて高く翔らん。

この詩の中でまず注目したいのは、第五句目「願得展嬋婉」である。「嬋婉」という語は、李善注にも指摘するところ、早くは『詩経』邶風「新台」に「嬋婉之求（嬋婉を之れ求む）」と見えており、漢代までの注釈によるならば、それは従順でしとやかな女性、あるいは見目麗しき女性をいう。⁽³⁾漢代における数少ない用例を見ても、その語の意味するところは概ねこの延長線上にある。⁽⁴⁾ところが、曹植詩における「嬋婉」は、人を指すのではなく、親密な情で満たされた場を指しているように見える。⁽⁵⁾というのは、この語の上に「展」という動詞が見えているからだ。この語法は、同じ曹植の「離友詩」にいう「展宴好兮惟樂康（宴好を展べて惟れ楽康なり）」（『藝文類聚』卷二十一）に非常

に近い。それでは、曹植が「嬋婉」にこのような意味を付与したのは全くの独創かと言えば、それはおそらくそうではない。思うに、曹植のこの詩句は、蘇武詩（三）にいう「歡娛在今夕、嬋婉及良時（歡娛は今夕に在り、嬋婉は良時に及ばん）」⁽⁶⁾をその直接的な淵源としているのではないか。蘇武の詩は、離別を目前に控えた夫婦の情愛を主題とする。そして、後ほど論及するように、この詩は、宴の場にて詠じられ享受された詩歌だと判断される。ここにおいて、しとやかで美しい女性を意味する詩語「嬋婉」は、情愛豊かな場を指す語へと転換した。そして、「歡娛」と「嬋婉」とが対を成す蘇武詩を経由して始めて、「嬋婉」を歡樂の場という意味で用いる曹植の詩句が成ったのだと私は考える。もしも、蘇武詩と曹植の詩とを同時代の産物と見ようとするならば、その偶然の一致する確率はあまりにも低いと言わざるを得ない。

曹植のこの詩が蘇李詩を踏まえていると判断される理由は他にもある。たとえば、冒頭にいう「清時難屢得、嘉会不可常」、この句は李善注にも指摘するところ、李陵詩（二）にいう「嘉会難再遇（嘉会は再びは遇ひ難し）」との影響関係が認められるが、同時に、蘇武詩（四）の「嘉会難兩遇（嘉会は兩たびは遇ひ難し）」にも酷似している。

そして、この三者で共有されている「嘉会」という語は、意外にも現存する漢代詩歌の中では蘇李詩以外には認められないし、建安詩の中でも、曹植の四言詩に一例見えるのみである⁷⁾。とすると、同じ五言詩の中で曹植の詩と蘇李詩の二首とが詩語を共有しているのは、偶々三者が同じ詩語を用いたためではなく、曹植が蘇李詩の世界を意識しながら、その中の一句を意識的に選び取った結果だと見る方がはるかに自然ではないか。また、曹植の詩の末尾に置かれた二句「願為比翼鳥、施翮起高翔」は、たしかに李善も言うように、古詩「西北有高樓」⁸⁾にいう「願為双鳴鶴、奮翅起高飛（願はくは双鳴鶴と為りて、翅を奮ひて起ちて高く飛ばん）」とその措辭が近似しているが、友人への送別という文脈でこうした表現を用いる発想は、蘇武詩（二）の結び「願為双黄鵠、送子俱遠飛（願はくは双黄鵠と為り、子を送りて俱に遠く飛ばん）」をも強く想起させる。更に、四句目の「人命若朝霜」は、『漢書』蘇建伝附蘇武伝に見える、蘇武に向けられた李陵の言葉「人生如朝露、何久自苦如此（人生は朝露の如し、何ぞ久しく自ら苦しむること此の如き）」とよく似ている。もっともこの詩句は、古詩「驅車上東門」にいう「年命如朝露（年命は朝露の如し）」にも似ているのだが、こうも李陵・蘇武に関連する辭句が

重なつてくると、それは偶然に偶然が重なった結果ではなく、曹植が意識的に、友人の送別という場面に李陵・蘇武の別れの物語を重ね合わせて表現しようとしたものではないかと思えてくる。李善がその注に『漢書』を引いて古詩を引かなかったのは、おそらく曹植のこの意識を掬いあげようとしたためではないだろうか。

建安文壇において、蘇李詩がすでに周知の作品群であったことを示す事例として、『玉台新詠』巻一、徐幹「室思」六章（其一）を挙げることもできる。

沈陰結愁憂	沈陰	愁憂結縈
愁憂為誰興	愁憂	誰が為にか興る。
念与君生別	念ふ	君と生きながら別れ、
各在天一方	各、天の一方に在るを。	
良会未有期	良会	未だ期有らず、
中心摧且傷	中心	摧 ^{くだ} け且つ傷む。
不聊憂殫食	殫食を憂ふるに聊 ^{よう} らず、	
慊慊常饑空	慊慊として常に饑空なり。	
端坐而無為	端坐して為す無く、	
髣髴君容光	君が容光を髣髴す。	

まず目を引くのは、第三・四句目「念与君生別、各在天一方」が、蘇武詩（四）の「良友遠離別、各在天一方（良

友は遠く離別し、各々天の一方に在り」によく似ていることだろう。だが、この措辞は、古詩「行行重行行」の冒頭「行行重行行、与君生別離。相去万餘里、各在天一涯（行き行きて重ねて行き行き、君と生きながら別離す。相去ること万餘里、各々天の一涯に在り）」ともよく重なり、また、上の句に限って言えば、古楽府「白鶴（艷歌何嘗）にいう「念与君離別（君と離別するを念ふ）」（『宋書』樂志三）とも酷似している。したがって、この第三・四句のみからは、果たして徐幹の詩が蘇李詩を踏まえて成ったものかどうかは判断できない。

ならば、この詩のどこに着目したいのかと言えば、それは続く第五・六句目の「良会未有期」「中心摧且傷」である。この二句はそれぞれ、蘇武詩（三）にいう「相見未有期（相見ゆること未だ期有らず）」、蘇武詩（二）にいう「中心愴以摧（中心は愴として以て摧く）」と極めてよく似ているが、実は両者の間で共有されている措辞、すなわち「〇〇未有期」、及び「中心〇△〇」は、現存する漢代詩歌の中でも、この二首の蘇武詩にしか認められない。徐幹の詩と蘇武詩との間にのみ認められるこの表現的一致を、時代の共有がなせるわざだと解釈するのには無理がある。なぜならば、この二つの措辞は、古詩や古楽府とも重なりと

ころのない、従って時代の空気を色濃く反映した表現だとは必ずしも言えないものだからである。思うに、徐幹は蘇李詩の世界を強く意識し、そのイメージを自らの詩に重ねるつもりで、異なる蘇武詩二首の中からそれぞれに印象深い詩句を抜き出し、若干のアレンジを加えた上でこれを取り込んだのではないか。別個の蘇武詩とそれぞれに類似関係を持つ辞句を隣り合わせに並べる徐幹のこの詩は、建安期、蘇李詩という作品群が、古詩や古楽府とは別に、すでにある独特なイメージを纏って流布していたことを強く示唆している。

徐幹のこの詩と同様に、蘇李詩特有の表現を踏まえたと思われる建安詩として、たとえば、繁欽「定情詩」にいう「遠望涼風至（遠く望めば涼風至る）」（『玉台新詠』巻二）は、李陵詩（二）の「遠望悲風至（遠く望めば悲風至る）」を、劉楨「公讌詩」にいう「永日行遊戲、懽樂猶未央（永日に行くゆく遊戲するも、懽樂は猶ほ未だ央ぎず）」（『文選』巻二十）は、蘇武詩（四）の「懽樂殊未央（懽樂は殊ほ未だ央ぎず）」を、王粲「從軍詩」五首（其五）にいう「客子多悲傷、淚下不可收（客子には悲傷多し、淚下りて収む可からず）」（『文選』巻二十七）は、蘇武詩（二）の「俛仰内傷心、淚下不可揮（俛仰 内に心を傷ましめ、淚下り

て揮ふ可からず」を、王粲「詠史詩」にいう「結髮事明君、受恩良不誓（結髮して明君に事へ、恩を受くこと良に誓はれず）」（『文選』巻二十一）は、蘇武詩（三）の「結髮為夫妻、恩愛兩不疑（結髮して夫妻と為り、恩愛は兩つながら疑はず）」をもじっている可能性が高い。ここに挙げた蘇李詩の辞句は、いずれも漢代のその他の詩歌には認められないものである。そうした蘇李詩特有の措辞にここまですら類似する句を建安詩の中に見出すことができるのは、蘇李詩と建安詩とが共時的に存在したためではなく、建安詩人たちが既存の蘇李詩の中から特定の措辞を選び出し、これを踏襲した結果に他なるまい。そして、その逆の流れ、つまり建安詩から蘇李詩に影響が及んだのだとは考え難いように思う。なぜならば、李陵・蘇武の離別の物語に仮託された詠み人知らずの詩歌に比して、建安詩の方がはるかに個別具体的な内容を湛えているからである。

この外、蘇武詩（二）に見える「昔為鵲与鵲、今為参与辰（昔は鵲と鵲と為り、今は参与辰と為る）」という表現は、曹植「種葛篇」にいう「昔為同池魚、今若商与参（昔は同池の魚為り、今は商と参との若し）」（『玉台新詠』巻二）、同「浮萍篇」にいう「在昔蒙恩惠、和楽如瑟琴。何意今摧頽、曠若商与参（在昔 恩恵を蒙り、和楽すること瑟琴の

如し。何ぞ意はん今は摧頽し、曠たること商と参との若し）」（同上）、徐幹「室思」六章（其五）にいう「故如比目魚、今隔如参辰（故は比目の魚の如し、今は隔てらるること参辰の如し）」に影響を与えていること明白であるし、また、先にも言及した李陵詩（二）の句「嘉会難再遇」、上述の曹植「送应氏诗」の他、同「雜诗」五首（其四）にいう「歡会難再遇（歡会は再びは遇ひ難し）」（『玉台新詠』巻二）、阮瑀「七哀诗」にいう「丁年難再遇（丁年は再びは遇ひ難し）」（『藝文類聚』巻三十四）にも波紋を広げている。ここでは端的な事例のみを挙げたが、建安詩における蘇李詩の辞句の部分的摂取は、もちろんこれだけに止まらない。このように蘇李詩の片鱗が複数の建安詩に散見するということは、それだけこの作品群が建安文人たちの間に文化的共通基盤として広く根を張っていたことを示すだろう。

以上、建安詩と蘇李詩との類似表現を分析してきたが、上述のごとき現象は、後漢末の建安年間、蘇李詩がすでに成立していたばかりか、それらが周知の詩歌群として流布していたことを前提として始めて成り立つものである。すると、蘇李詩の成立は、建安詩人たちの活躍した後漢末よりはかなり早い年代だと判断せざるを得ない。

蘇李詩は、建安詩とばかりでなく、漢代の古詩・古樂府との間にもいくつかの類似句を持つてゐる。それでは、この両者はどのような関係にあると見るのが妥当だろうか。

蘇李詩と古詩・古樂府との近似性はしばしば指摘されるところだが、詳細に検討してみたところ、意外にも双方は必ずしも深く重なり合うわけではないようだ。明らかな影響関係が認められる事例としては、先にも言及した古詩「行行重行行」の「各在天一涯」が、蘇武詩（四）の「各在天一方」、及び李陵詩（一）の「各在天一隅（各、天の一隅に在り）」と酷似していること、蘇武詩（二）に「慷慨有餘哀（慷慨して餘哀有り）」、「願為双黃鵠」「冷冷一何悲（冷冷として一に何ぞ悲しき）」が、古詩「西北有高楼」との間に、「慷慨有餘哀」という同一句、「願為双鳴鶴」「音響一何悲（音響 一に何ぞ悲しき）」という類似句を持つことが挙げられるくらいである。この他、李陵詩（三）の「行人難久留、各言長相思（行人は久しくは留まり難し、各、長く相思ふと言ふ）」、蘇武詩（三）の「生当復來歸、死当長相思（生きては當に復た來り歸るべし、死しては當に長く相思ふべし）」が、古詩「孟冬寒氣至」の「上言長

相思、下言久離別（上には長く相思ふと言ひ、下には久しく離別すと言ふ）」、古詩「客從遠方來」の「著以長相思、緣以結不解（著るるに長く相思ふを以てし、縁るに結んで解けざるを以てす）」、古樂府「飲馬長城窟行」の「上有加餐食、下有長相思（上には餐食を加へよと有り、下には長く相思ふと有り）」（『藝文類聚』卷四十二）との間で「長相思」という語を共有していることが目に留まるが、先行研究によれば、この語は夙に前漢中期の鏡の銘文に見えるとい¹²い、しかも、この語を織り込む措辞のあり方は、上記のごとく詩ごとに微妙に異なっているので、蘇李詩は、古詩・古樂府とは関わりなく、広く人口に膾炙した語を取り込んだに過ぎない可能性もある。

さて、このような類似句のある一方で、古詩の中には「涉江采芙蓉」「庭中有奇樹」「迢迢牽牛星」「青青河畔草」、及び「蘭若生春陽」（『玉台新詠』卷一）のように、蘇李詩とは単語のレベルでさえほとんど関わり合わない作品があり、他方、蘇武詩（一）のように、古詩・古樂府との間に明確な共通点を見出せないものもある。総じて言えば、蘇李詩と古詩・古樂府とは、たしかに単語の共有やイメージの類似性は散見するものの、¹³明確な影響関係の認められる辞句となると、それはごく一部の作品に限られると言わざ

るを得ない。

ところが一方、蘇李詩の内部には多くの類似句を認めることができる。その顕著な例だけでも、たとえば上文に挙げた李陵詩(一)の「各在天一隅」と蘇武詩(四)の「各在天一方」、前章でも言及した李陵詩(二)の「嘉会難再遇」と蘇武詩(四)の「嘉会難兩遇」の他、李陵詩(一)の「仰視浮雲馳(仰ぎては浮雲の馳するを視る)」と蘇武詩(四)の「仰視浮雲翔(仰ぎては浮雲の翔るを視る)」、李陵詩(二)の「行人懷往路(行人は往路を懷ふ)」と蘇武詩(三)の「征夫懷往路(征夫は往路を懷ふ)」、及び蘇武詩(四)の「征夫懷遠路(征夫は遠路を懷ふ)」のごとくであり、しかも、古詩「行行重行行」とも重なりを持つ最初の事例を除いては、その辞句は全て蘇李詩の内部でのみ共有されている。ただ、ここにおいても蘇武詩(一)はいずれの蘇李詩とも重ならない。また、先ほど古詩「西北有高樓」との強い関係性が確認された蘇武詩(二)は、単語レベルではともかく、一句を構成する措辞という観点からすれば、他の蘇李詩とそれほど深い関わりを持つていないわけではないように看取される。だが、こうした例外はあるものの、蘇李詩という作品群は一体に、古詩・古樂府と比べて凝集傾向の強い、比較的均質な詩群であると言えるそ

うだ。このことは、これらの詩が全て、慕わしい人との離別の場面を詠ずるものであるということとも響き合うだろう。

以上を要するに、蘇李詩はその内部に多くの類似句を持つ一方、古詩・古樂府とは一部の作品とのみその辞句を共有するに過ぎない。古詩・古樂府と蘇李詩とが、もしも同じ時代、同様な場で誕生したのだとすると、類似句の分布がかくも偏るはずはあるまい。では、この両者の関係性はどう解釈するのが妥当だろうか。思うに、主題も表現も拡散傾向の強い古詩・古樂府は、その生成が比較的長期にわたって徐々に行われていった作品群なのではないか。これに対して、蘇李詩は一つの主題に即して作られており、ある特定の目的のために、ごく短い期間の内に成った詩群であるように感じられる。もしもこの推測が的外れでないならば、蘇李詩の作者は、その別れの宴という主題にふさわしい辞句を、既存の古詩・古樂府の中から適宜選び取って用いたのだとは考えられないだろうか。このことを、先にも言及した蘇武詩(二)を例に挙げて検証したい。

黄鵠一遠別

黄鵠 一たび遠く別れ、

千里顧徘徊

千里に顧みて徘徊す。

胡馬失其群

胡馬 其の群を失ひて、

思心常依依

思心 常に依依たり。

何況双飛龍

何ぞ況や双飛龍の、

羽翼臨当乖

羽翼の当に乖くべきに臨めるをや。

幸有絃歌曲

幸ひに絃歌の曲有り、

可以喻中懷

以て中懷を喻ふ可し。

請為遊子吟

請ふらくは遊子の吟を為さんことを、

泠泠一何悲

泠泠として一に何ぞ悲しき。

絲竹厲清声

絲竹は清声を厲しくし、

慷慨有餘哀

慷慨して餘哀有り。

長歌正激烈

長歌は正に激烈たりて、

中心愴以摧

中心 愴として以て摧く。

欲展清商曲

清商の曲を展べんと欲して、

念子不能歸

子の歸る能はざるを念ふ。

俛仰内傷心

俛仰 内に心を傷ましめ、

淚下不可揮

淚下りて揮ふ可からず。

願為双黃鵠

願はくは双黃鵠と為り、

送子俱遠飛

子を送りて俱に遠く飛ばんことを。

冒頭の二句は、古樂府「双白鵠」にいう「五里一反顧、

六里一徘徊（五里に一たび反顧し、六里に一たび徘徊す）」（『玉台新詠』卷一）をアレンジしたものである。

また、先にも指摘したように、絃歌する寡婦に託して孤独

感を詠じた古詩「西北有高樓」から少なからぬ措辞を直接

的に取り込み、男女離別の歌である古詩「行行重行行」か

らは「胡馬」「遊子」という単語を選び取つてゐる。今

ここに挙げた古詩・古樂府には相互に影響し合つた痕跡が

認められないことから、蘇武詩はこの三者と同列に並ぶの

ではなく、それらを俯瞰し得る立場に位置して、適宜それ

らから辞句を撰取したと見るのが妥当であり、したがつて

この四者の中では蘇武詩が最も新しいと判断されよう。

それでは、蘇李詩の成立は大体いつ頃と推定し得るだろ

うか。先に挙げた蘇武詩（二）を例にとつて推測すれば、

この詩は、前章でも見たとおり複数の建安詩に影響を与え

ている一方、古樂府「双白鵠」や古詩「行行重行行」「西

北有高樓」を撰取しつつ成つていたのであった。「双白鵠」

の成立年代は未詳だが、その辞の素朴さから見てそれほど

時代を下るものではないだろう。二首の古詩については、

前漢末頃、遅くとも後漢初頭にはすでに成立していたと推

定される。⁽¹⁶⁾ そうしてみると、この蘇武詩の成立は、おおよ

そ後漢中期頃と見るのが妥当だろう。そして、その他の蘇

李詩も、この詩群の均質性から判断して、おそらくこれと

ほぼ同時期に成つたと考えてよいように思う。

漢代の古詩・古樂府を取り込み、後の建安文壇に多くの文辞を提供した蘇李詩だが、それでは、この詩群は後漢のある時期、いつたいどのような場で誕生したのだろうか。そのヒントは作品自体の内に蔵せられている。すなわち、蘇李詩は離別を詠ずるといふ点で一貫しており、また同詩群の中に、他の作品には見出せない多くの類似句を共有していたのであったが、こうした特徴は、この詩群を集団による遊戲的文芸と捉えたとき始めて合点のいくものとなるのではないか。一つのテーマを設定し、類似する辞句をアレンジしつつ踏襲し合うことは、仲間どうしの符牒的諧謔として、共有されたその場を愉快な気分を満たすだろう。では、この種の文芸が行われるのはどのような場においてか。後漢時代、それは宴席という場を措いて他には考え難い。

蘇李詩を宴の歌だとする推測は、この詩群の内部に散りばめられた様々な具体的事物や言葉によって裏付けることができる。まず、蘇武詩（四）の「嘉会難再遇、懽樂殊未央」、李陵詩（二）の「嘉会難再遇」は、まるで眼前の宴を慶賀するかのような口ぶりだ。宴に欠かせない酒は、李

陵詩（二）に「對酒不能酬（酒に対するも酬める能はず）」「独有盈觴酒、与子結綢繆（独だ觴に盈つる酒有り、子と綢繆を結ばん）」、蘇武詩（一）に「我有一罇酒、欲以贈遠人。願子留斟酌、叙此平生親（我に一罇の酒有り、以て遠人に贈らんと欲す。願はくは子留まりて斟酌し、此の平生の親を叙べよ）」と歌われている。また、蘇武詩（二）に点綴された「幸有絃歌曲」「絲竹厲清聲」「長歌正激烈」「欲展清商曲」などの辞句は、当時の宴席が常に管弦樂の調べに彩られていたこととまさしく響き合う。更に、蘇武詩（二）に登場するはぐれ鳥、蘇武詩（三）で詠じられている夫婦の離別は、一見宴席とは無関係な内容のようにも思われるが、実はこの時代、こうした場で演じられる歌曲には頻見するモチーフであった。⁽¹⁷⁾

こうしてみると、蘇李詩は宴席で行われる遊戲的文芸であつたと見てほぼ間違いないように思われる。ただ、李陵も蘇武も、匈奴に屈するや否やという厳しい選択を迫られ自ら下した決断を我が身に引き受けて生きた人物である。そのような苛烈な人生を歩んだ人物たちの物語が、果たして宴席という娯樂的な場に馴染むものだったのかどうか。そこで想起したいのが、『漢書』蘇建伝附蘇武伝に見える次の一節である。漢に帰還することとなつた蘇武のために、

李陵は酒宴を設けてその前途を祝し、併せて自らの胸中を打ち明けたが、その別れの場面での出来事として、次のような記述が見えている。

陵起舞、歌曰、「径万里兮度沙幕、為君將兮奮匈奴。

路窮絕兮矢刃摧、士衆滅兮名已隕。老母已死、雖欲報恩將安歸。」陵泣下數行、因與武決。

陵は起ちて舞ひ、歌ひて曰く、「万里を徑て沙幕を度り、君が將と為りて匈奴に奮ふ。路は窮絶して矢刃は摧かれ、士衆は滅して名は已に隕つ。老母は已に死し、恩に報いんと欲すと雖ども將た安くにか歸らん」と。陵泣下ること數行、因りて武と決る。

ここには、「起舞」「歌」「泣下數行」といった語句とともに、「兮」字を中に挟んで前後に三言を置く、『楚辭』九歌に由来するいわゆる九歌型歌謡が配せられているが、李陵主催の酒宴で行われたというこれら一連の歌舞や振る舞いは、彼らの置かれた情況の厳しさに比してあまりにも芝居がかっているように感じられないか。これが李陵その人の實際の行為だとは到底思えないし、著者の班固による潤色だとも考え難い。というのは、この蘇武伝に見えるのと全く同質かつ同様式の記述が、『史記』の項羽本紀、高祖本紀、刺客列伝（荊軻）、『漢書』の高帝紀下、西域伝下

（烏孫國）などにも認められるからだ。¹⁸ もしもこれが事實の忠実な記録、もしくは歴史家の筆の遊びであるならば、かくも類型化した描写が散見することの理由が説明できない。思うに、『史記』や『漢書』の成立当時、荊軻、項羽と劉邦、李陵と蘇武、烏孫公主といった人物たちを主人公とする歌舞劇のような文芸が行われていて、そうした先行テキストが、史実を活写するための文彩として歴史家に取り上げられたのではないだろうか。¹⁹

李陵と蘇武の物語は、漢代、九歌型歌謡を伴う演劇的文芸様式をもつて語り伝えられており、それが披露される場は、その物語中にいみじくも示されているとおり、酒宴の席であつたのだろうと私は考える。漢代の宴席では、歌謡、箏、管弦樂、舞踊、雜技など実に様々な芸能が演じられていたが、その中に李陵と蘇武の物語も含まれていたのではないだろうか。この推測がもし妥当であるならば、酒宴を舞台とするこの歌舞劇は、眼前の宴席をも舞台の一部に引き入れて、見る者の感情を心の底から揺り動かすような演劇的空間を現出させたことだろう。そして、そこに居合わせた人々の内に呼び起された感情が、蘇李詩という連作五言詩を生んだのだとも考え得る。なぜならば、五言詩もまた宴席を舞台に展開した文芸であつて、九歌型歌謡を伴う李陵

と蘇武の歌舞劇が、宴という場を介して、五言詩型にその内容を写し取られた可能性は非常に高いと思われるからである。

九歌型歌謡と五言詩との関係については、問題の方向性が異なるのでこれ以上踏み込まないが、いずれにせよ、李陵と蘇武の物語が宴席という場に何ら違和感なく溶け込むものであったことは確かだと言える。ならば、先ほど示した見通し、すなわち彼らの離別を詠ずる蘇李詩は、宴席における遊戯的文芸だったのでないかという推測は十分に成り立ち得るだろう。そして、蘇李詩の基本的性格をこのように捉えたとき、蘇武詩（四）の中に匈奴とは何ら関わりのない「江漢」が詠み込まれていることへの疑問も自ずから氷解してゆくように思われる。蘇李詩はもともと彼ら二人の実体験を踏まえるものではないのだから、このような南方の河川名が登場したとしても訝るには当たらないのである。「江漢」を現実の地名としてでなく用いた一事例として、『文選』卷一、班固の「西都賦」に、長安の上林苑に棲む鳥たちの様子を描いて「朝発河海、夕宿江漢（朝には河海を発し、夕には江漢に宿る）」とある。

四

蘇李詩という五言詩群は、漢代の古詩・古樂府よりは遅れ、建安文壇には先んずる後漢のある時期、宴席を彩る遊戯的文芸として誕生したと推定し得る。それでは、蘇李詩の成立を促すような具体的な場、つまり、北方異民族への関心と宴の文芸とが並存するような場は果たして歴史上に実在したのだろうか。結論から言えば、和帝（在位八一—一〇五）の初め、車騎將軍、大將軍として北匈奴を征伐した外戚、竇憲の周辺には、こうした作品群が生まれてもおかしくはない情況があった。『後漢書』竇融伝附竇憲伝、及び文苑伝上（傳毅）に記すところによると、彼の幕下には、班固、傅毅、崔駰といった当代第一級の文人たちが集い、その文学活動の盛んなことは当世に冠絶していたという。匈奴にゆかりの深い有力者とその下に召された文人たち、彼らの集う宴席で、李陵と蘇武の離別に事寄せた遊戯的五言詩が競作されたとしても全く不思議ではあるまい。なお、この和帝期には、古詩の中でも別格扱いの一群、これまで拙論で仮称してきたところの第一古詩群はすでに成立していたと判断され²⁰、先ほど蘇李詩に明らかな影響を与えていると指摘した古詩「行行重行行」「西北有高楼」は、

いずれもこの第一古詩群に属するものである。また、竇憲の下に集った文人の一人である傅毅は、第一古詩群には属さない古詩「冉冉孤生竹」の作者と目されている人物であつて（『文心雕竜』明詩篇）、この頃になると、五言詩が文人たちの間でもかなり抵抗なく作られるようになっていたことが窺われる。これらの点を考え合わせると、蘇李詩成立の場を竇憲の幕下あたりと比定することは、さほど無理のない推測と言つてもよいように思うのだが、いかがであるうか。ただし、これはあくまでも推測に過ぎない。私たちには比定することしか許されていない。これらの詩群には、作者名が全く記されていないのだから。当時において、五言詩はまだ、文人が自ら名乗りを上げて詠ずるような正統的文学様式とは成り得ていなかった。長らく伏流していた五言詩の湧出は、周知のとおり後漢末の建安文壇まで待たねばならない。

注

(1) 代表的な論著として、馬雍『蘇李詩制作時代考』（商務印書館、一九四二年）、鈴木修次『漢魏詩の研究』（大修館書店、一九六七年）第二章、第四項、四「伝蘇武・李陵詩考」がある。また、推定の根拠は異なるものの、遼欽立『漢詩

別録』（一九四五年八月脱稿、『漢魏六朝文学論集』陝西人民出版社、一九八四年に収載）辨偽第一、甲「蘇・李詩」も、その成立年代を後漢末の靈帝・獻帝期と推測している。

(2) 李陵・蘇武の名を冠するこの作品群は、『文選』の他にも、『古文苑』巻八にまとめた数の作品が収録されているが、その擬作の可能性が払拭できないためである。鈴木前掲書三二六—三二七頁を参照。

(3) 『毛詩』では「燕」を「燕」に作り、その伝に「燕とは安婉とは順なり」という。また、『韓詩』では「嬋婉とは、好き貌なり」と解釈されている。清の王先謙『詩三家義集疏』巻三上を参照。

(4) 『文選』巻二、張衡「西京賦」にいう「然後歷掖庭、適驪館、捐衰色、從嬋婉」の薛綜注に「嬋婉とは、美好の貌なり」と。同巻二十三、王粲「贈士孫文始」詩の「人亦有言、靡日不思、矧伊嬋婉、胡不懷而」における「嬋婉」も、女性を指す語ではないが、麗しき人という美称である点で『詩経』の伝統の上に立っている。

(5) 『文選』五臣注（張銑）は、「嬋婉とは、歡樂なり」と注している。

(6) 以下、本文中に挙げる蘇李詩は、初出のものについてのみ書き下し文を付す。

(7) 「元会詩」に「乃為嘉会、宴此高堂（乃ち嘉会を為して、此の高堂に宴せん）」（『藝文類聚』巻四）と。

(8) 古詩の引用は、特に出典を示さない限りは『文選』巻

二十九に拠っている。

- (9) 類似句は、『漢書』西域伝下に引く烏孫公主細君の歌にも「吾家嫁我兮天一方（吾が家は我を天の一方に嫁せしむ）」と見える。だが、「各在」という措辞まで含めて考えると、蘇李詩との直接的な影響関係は古詩の方がより深いと判断される。

- (10) 古詩「東城高且長」にも「首響一何悲」「思為双飛燕（思ふ 双飛燕と為らんことを）」という類似句が見えるが、この詩は古詩「西北有高樓」を展開させたもののように看取され、蘇武詩との直接的な影響関係は薄いと判断される。また、『古詩紀』卷十所収の古詩「步出城東門」には「願為双黃鵠」という同一句が見えているが、その素性が不明であるため、今は保留としておく。

- (11) 『文選』卷二十七は「長相思」を「長相憶」に作る。なお、『玉台新詠』卷一では、この古樂府を蔡邕の作としている。
- (12) 石川三佐男「中国前漢『君有行鏡』の銘文について―古詩行行重行行篇との比較に及ぶ―」（『専修国文』第四十六号、一九八九年）を参照。

- (13) これらの諸篇は、古詩の中でも最も古層に属するものと推定される。拙論「古詩誕生の場」（『中国中世文学研究』第四十五・四十六合併号、二〇〇四年）を参照されたい。

- (14) 馬・鈴木前掲論著に詳細な指摘がある。

- (15) 『宋書』樂志三にも収録されているが、余冠英「樂府歌辭の拼湊和分割」（『漢魏六朝詩論叢』棠棣出版社、一九五二

年）は、『玉台新詠』所収の方をより原辭に近いものと見る。妥当と判断される。

- (16) 拙論「古詩」源流初探―第一古詩群の成立―（『中國中世文学研究』第四十三号、二〇〇三年）を参照されたい。

- (17) 前掲の拙論（注16）を参照されたい。

- (18) 漢代における九歌型歌謡の盛行については、拙論「原初的『古詩』の性格―楚辭―九歌との関わりを手がかりとして―」（『六朝文学術学会報』第十集、二〇〇九年）の中でも言及している。

- (19) 宮崎市定「身振りと文学―史記成立についての一試論―」（初出は『中国文学報』第二十冊、一九六五年四月。『宮崎市定全集5』岩波書店、一九九一年に収載）から着想を得た。ただ、宮崎論文は九歌型歌謡を含む演劇的記述について特に言及することはしていない。

- (20) 第一古詩群の範囲、及びその成立時期については、拙論「陸機擬する所の古詩について」（『中国文学論集』第二十八号、一九九九年）、及び「民国時代における五言古詩の研究―その成立年代を巡る論争を中心に―」（『広島女子大学国際文化学部紀要』第十号、二〇〇二年）を参照されたい。

〔付記〕本稿は、平成二十年度科研費・基盤研究C「漢代五言詩歌の伝播とその文学的昇華の過程に関わる研究」による成果の一部である。

（県立広島大学）